

ケーフェイス。

ある女子プロレス物語

作 丸尾聡

登場人物

- 桂木ひろみ かつての新日本女子プロレスのエース、ザ・クール桂木
- エガミコウジ ミスターエガミ。元新日本女子プロレスレフリー。錦糸町大会で復帰。
- スマイリー光子 かつての新日本女子プロレスの若手。錦糸町大会を大田原とともに実現。
- ビッグイーター大田原 かつての新日本女子プロレスの若手。スマイリーとのコンビは、ボンバーシスターズ。
- カドタ かつての新日本女子プロレスの営業部長。錦糸町大会の営業を務めている。
- クニサキ 錦糸町大会でデビューを果たす新人レフリー。
- 安西さくら 元新日本女子プロレスの選手。結婚して幸せな生活を送っている。桂木のことを、憧れながらも恨みに思っていた。
- 遠山昭雄 桂木ひろみの夫
- デンジャラス有明
- ハンマー長谷川
- カッター前園
- デビル肉丸

ザ・クール・桂木の懐かしい入場テーマ。歓声が聞こえる中、客席の明かりが落ちていく。明かりがつくところには、体育館の一室。そこは今日行われる女子プロレスの大会の選手控室になっている。ガランとした殺風景な部屋である。声が聞こえてくる。この大会の営業を取り仕切るカドタが、かつての新日本女子プロレスのエース、ザ・クール桂木、今は、桂木ひろみを連れてやつてくる。

カドタ (入口のドアを開けながら) さあ、とにかく入って。さあ。

少し沈黙があつて、桂木は中に入ろうとしないようだ。

カドタ オレもただ帰すわけにはいかないからさ。とにかく、中へ。さあ。

桂木が入ってくる。花束を2つ抱えている。その控室になにか感じるようだ。

カドタ 懐かしい？

桂木 …。

カドタ 懐かしかったよ、オレは。20年ぶりなものな。

桂木 すこーし、ね。

カドタ 変わらないな。

桂木 え？

カドタ ザ・クール桂木の決め台詞じゃないか。懐かしい。

桂木 そうか…でも、この控室も20年分、古くなってる。

カドタ え？

桂木 これ…。

壁にかかっていた試合用のコスチュームを見る。

桂木 こっちが大田原で、こっちが光子。

カドタ あたり。二人は今日二試合出場だからメインイベントではお色直しするんだ。ニューコスチュームだよ。

桂木 へえ。お金かかってるね。

カドタ そりゃ、新日本女子プロレス復活大会だから。あいつらがプロモーターだから気合入ってるよ。

桂木 お客入ってるんだ。

カドタ え？

桂木 なに。

カドタ プロレス関係の新聞や雑誌、ネット全然見てないって…。

桂木 そうよ。

カドタ でも、来てくれた。

桂木 ……。

カドタ 7割かな。だいぶ頑張って営業かけたんだが客入り。

桂木 充分じゃない。

カドタ 直前でスポンサーがついてね、チケット引き取ってくれた。だいぶ値段はたたかれたけど。

苦しいのに変わらない。

桂木 カドタさんは変わらないな。

カドタ ……。

桂木 二人は？

カドタ え？

桂木 スマイリー光子とビッグイーター大田原は。

カドタ ああ、もうじき休憩前のあいつらの試合が終わるよ。

カドタ窓を開ける。そこからは体育館のフロアのリングが遠く見える。歓声が聞こえてくる。

カドタ ほら。

桂木は動かない。

カドタ あ、大田原。バカ。

客席の笑い声。

桂木 どうしたの。

カドタ また、技かけ損なつた。遅いんだよタイミングが。ああ、盛り上がるためにやってんじやなくてほんとに失敗してるからな。食い過ぎなんだよ。

桂木 (笑う)まだ、そうなんだ。変わってないんだ。ビッグイーター大田原。(おかしくてたまらない)

カドタ あ、ああ。

桂木 (笑い続けながら)じゃあ、光子も。

カドタ うん。相変わらずやられてもやられても笑ってる。

桂木 (笑いながら)たくさん食べる大田原だからビッグイーター大田原、いつでも笑ってるからスマイリー光子、変わらないんだなあ。

カドタ せめて、その花束、リング上で渡してやってくれないか。

桂木 (笑いやみ)

カドタ ビッグイーターもスマイリーも喜ぶと思うんだ。二人のリングネームをつけてやったの、あんたじゃないか。

桂木 ほかにつけようがなかったんだ。

カドタ あいつらバイトしてさ。

桂木 バイト？

カドタ ファイトマネーだけじゃ食えないし、それに新しいコスチューム作るんだって。ビッグジャパン女子プロレスのデビル肉丸が亀戸でやってる店があつて、そこで練習終わって毎日働いてただけど、首になってさ、その後は深夜の道路工事の誘導やつてた。

桂木 ……なんで首になったの？

カドタ ふたりとも変わってるって、客に気持ち悪いって言われたらしい。それで肉丸が、すまないけどって。いい年だし。

桂木 ……

カドタ なあ、リングに上つてくれないか。

間。

カドタ あ、いや、そういう意味じゃなくて、激励してやってくれ。ザ・クール桂木が帰ってきたら客だつて喜ぶ。

桂木 (首をふる)

カドタ そうか……。 (窓を締める)

桂木 ほんとに？

カドタ え？

桂木 そんなわけじゃない。20年よ。変わらないはずない。花束置いて帰るつもりだった。でも、カドタさんに見つかっちゃってあんなに言うからここに来た。二人に花束を渡して、帰る。

カドタ 試合も見ないのか。

桂木 うん。

カドタ …。オレ、行かなきゃ。人手不足でさ、もぎりも売店も全然足りないんだよ。今日はリング作りまでやったんだ。

桂木 ご苦労様。

カドタ ザ・クール桂木にいつもそう言われてオレたち頑張ってたよ。あの頃。俺にできることは一生懸命やってさ。

桂木

…。

カドタ 二人、もう来るんじゃないかな。

桂木 うん。

カドタ、控室を出て行く。桂木、一人残る。やがて、窓に近寄り、開けようとする。『コノヤロー』の声とともに、見習いレフリーのクニサキが転がり込んでくる。続いてやってくるのはスマイリー光子とビッグイーター大田原だ。二人は、クニサキの未熟なレフリーングに怒っているのだ。フライングメーヤーや吊り天井など出たらご機嫌。技をかけながら、以下のようなやりとり。

大田原 クニサキ、コノヤロー。

クニサキ い、痛い。大田原さん、やめてください。

光子 おまえがレフリーなんて100万年早いんだよー。

クニサキ み、光子さん、怖い、怖い。笑いながら投げないでください。

光子 こういふ顔なんだよ！ イーター！

大田原 スマイリー！

と、ここで二人は合体技に行くが、大田原、タイミングを外す。クニサキ、待つて受ける。

クニサキ 大田原さん、また外れてます、タイミング。 (と倒れる)

クニサキを抱え起し、

大田原 クニサキ、最後のカウント、どういっつもりだよ。

クニサキ どういうつて…

光子 おまえ、スカイハイボムウエイで決まりのはずだったろうが。

クニサキ 怖いです、怖いです、光子さん。

大田原 あれがフィニッシュの決め技にならなかつたら、ボンバーシスターズの試合にならねえだろうが。

クニサキ すいません、すいません。でも…。あれ？(桂木に気がつき)

光子 …クールさん。

大田原 クールさん。

クニサキ ザ・クール桂木だ。ザ・クール桂木、1990年全日本女子プロレス入団、一流大学出、一流企業から転身した女子プロレスラーとして脚光を浴び、翌年早くもオールパンフィック選手権で初のベルト。1994年全日本女子プロレスを退団して新日本女子プロレスを設立。

WWWC世界王者としてエースに君臨。1997年ベルトをかけた宿敵アンジャラス有明との死闘に敗れ、突如引退。それ以降プロレスとの関わりを断つ。1964年生まれ。現在54歳。

光子・大田原 言うなー。

クニサキ ちなみにボンバーシスターズ、1977年生まれ、そろって惑わすの四十。

光子・大田原 このプロレスオタクが！(と投げる)

クニサキ、動ぜず、立ち上がり、桂木に、

クニサキ 握手してください。大ファンです。(と手を服でこしこしして差し出す)

光子・大田原 オタク!

桂木、握手して、その手を服でゴシゴシする。

光子・大田原 クール!

クニサキ 感激だあ。

大田原 どうしたんですか。

光子 びっくりしました。

大田原 全然連絡とれなかったから…やっぱり来てくれたんですね。

光子 うん。

桂木 ああ。

大田原 どうしてたんですか。今まで。

桂木 うん…。なんとかね生きてた。

大田原 生きててよかった…

光子 まさか、ホントに来てくれるなんて…

二人泣く。

桂木 光子、笑いながら泣くな。ちよつと怖い。大田原、泣きながら食べるな。気持ち悪い。

光子・大田原 はい。

桂木 花束を持ってきた。こんなことしかできないけど。

光子 それ、もしかして…

桂木 え？

光子 サプライズでリングに登場してくれるんですか。

桂木 いや、

大田原 ザ・クール桂木、20年ぶりの電撃復帰。

桂木 おまえら、馬鹿言うなよ。

クニサキ そうか。20年ぶりの新日本女子プロレス復活にかつてのエースが花を添える。

光子 カドタさんですよね。

桂木 なに？

光子 だから、このアイデア。

桂木 だから、ちよつと待て。カドタさんとは何も話してないよ。さっき、偶然会っただけ。

大田原 なんだ、話してないのか。

光子 残念。でも、エガミさんも喜ぶんじゃないかな、もう会いました？

桂木 エガミ？ コウジ関わっているの、この大会。

大田原 そうですよ、復活です。エガミさんも。

光子 二人でお願いに行ったらレフリー引き受けてくれたんです。

大田原 あれ？ でも、知らないんですか。

桂木 離れていたから。ほんとに。

大田原・光子 …

クニサキ あのコウジさんのところでレフリー見習いやつてるクニサキです。今日、デビューさせて

もらいました。よろしく願います。

大田原 使えねえけどな。

クニサキ アイデアがあります。

光子 アイデア？

クニサキ はい。ザ・クール桂木の登場なんですけど、単に花束贈呈じゃつまらないでしょ。だから、

ドアが開く。レフリーのエガミコウジである。一瞬沈黙。

クニサキ あ、コウジさん。ザ・クール、ザ・クール桂木ですよ！

桂木とエガミが一瞬見つめ合う。

クニサキ ほら。今、花束持ってきたって言うから、登場の仕方思いついて、話そうとしてたんです。ちようど良かった、コウジさん聞いてください、フィニッシュのスカイハイボムウエイでコーナーに二人が上がったら…

エガミ …ケーフェイ。

クニサキ え。

光子 エガミさん。

大田原 どういうことですか、だつて、

クニサキ ザ・クール桂木ですよ。そんな部外者みたいに。ケーフェイなんて。

エガミ ケーフェイ。ザ・クール桂木じゃない。桂木ひろみだろ。

桂木、控室を出ようとするが……。回想。男、桂木の結婚相手、遠山昭雄が登場する。

遠山 ザ・クール桂木じゃない。桂木ひろみだろ。

桂木 ……。

遠山 おまえは、桂木ひろみになったんじゃないか。

桂木 ……。

遠山 なんで黙ってるんだ？

桂木 わからないから。

遠山 え。

桂木 なんで言っているのか……。わからないから。

遠山 こどもは、また作ればいいじゃないか。そのことにおまえが責任を感じているのなら……

桂木 そうじゃない。感じていない、責任。

遠山 おまえ……。

桂木 ひどいよね。ひどいこと言った、あたし。でも、そうなんだ。

遠山 わからないんだ。じゃ、なんで別れなきゃいけない？ 俺のこと嫌いになったんじゃない、そ

う言っただよな。

桂木 うん。

遠山 おまえ、まさか……。

桂木 だから、わからないのよ、わたし。

遠山 わからないのは俺だ。……バカなこといだすんじゃないだろうな。

桂木 バカなことって？

遠山 復帰するんじゃないだろうな。

桂木 馬鹿なことだね、それは。

遠山 そうだよな。

桂木 ごめんね。

遠山 え？

桂木 ほんとにわからないんだ。

遠山 あんな八百長何がいいんだ。

桂木 八百長か…。

遠山 八百長じゃないか。俺だって、少しは知ってるよ。

桂木 ロープに振られたら走って帰ってきたり、試合の結末が決まっていたり…。

遠山 そうだよ。インチキじゃないか。八百長…

桂木 ケーフェイ。

遠山 はあ?!

桂木 話を聞かれちゃいけない時、そういうの。

遠山 聞かれちゃいけない話？

桂木 (少し笑って) やっぱり懐かしいなあ。

遠山 なんなんだよ。

戻って。

光子 コウジさん。

エガミ　なんだ。

光子　ここには、ケーフェイなんて言葉使う必要ある人、誰もいないじゃないですか。

クニサキ　そうですね。聞かれちゃいけない人なんていないですよ。

大田原　わたしたちみんな仲間なんじゃないですか。

クニサキ　あの、それとも、なにか、そうしなきゃいけない…

エガミ　クニサキ。

クニサキ　はい。

エガミ　なんだ、さっきのレフリングは。光子、それから大田原、お前らの試合もなつてない。メインイベントあんならだったら、外人組にやられるし、客も黙っちゃいけないぞ。

クニサキ・光子・大田原　…はい。

エガミ　クニサキ、レフリングのチェックだ。

クニサキ　はい？

エガミ　行つてろ。先に向こうの控室に行つてろ。すぐ行く。

クニサキ　はい。(と出て行こうとするが、行かない)

エガミ　おまえら、カドタに言われてたんじゃないのか。売店の手伝い。

光子　あ。

大田原　そうだ。

エガミ　一枚でも二枚でもTシャツ売ってこいよ。

光子　(行こうとするが)桂木さん、待つてください。メインまでに休憩終わって時間あるから。

桂木　わたしは…。

大田原　お願いします。話もあるんです。

二人去っていく。エガミも部屋を出ようとするが、まだいるクニサキに気が付き、

エガミ　なんだ？　どうした。

クニサキ　20年前、1997年。なにがあつたんです？

桂木　え？

クニサキ　絶対に負けないはずの試合に、ザ・クール・桂木は負けた。僕はまだ子どもだったけど、おかしいと思った。デンジャラス有明は強かったけど、そういう話じゃない。新日本女子プロレスは、エース、ザ・クールで持っていて、その後の海外展開も決まっていた。負けただけじゃなくて、突如引退。発表されていた海外遠征は流れ、エースを失った団体は解散、いや、倒産した。ありえないです。

エガミ　おい、お前突然何言い出すんだ。

クニサキ　プロレスの世界の事件なんて、必ずどこかに「真相」が転がってますよ。ネットで調べればすぐわかる。でも、この「事件」だけはわからない。噂はありますよ。でも、当事者の話が出てこない。負けたザ・クールも勝ったデンジャラスも引退した。あの試合、会場はここ江東区体育館でした。そしてあの試合のレフリーは、エガミさん、あなたです。

エガミ　やめろ。プロレスオタクならオタクらしく、観客席にいろよ。

クニサキ　いやです。でも知りたいんです。何があつたんですか。

エガミ　簡単に触れないものつてのが、あるんだよ。

クニサキ　……さっきのエガミさんの態度……、やっぱりなにかあるなら知りたいです。いや、知らなく

ちやいけないいつて思ってるんです。ずっと知ろうとしてきました。

エガミ おまえ、なんでこっち側に来て、レフリー見習いなんてやってる。

クニサキ プロレスだけが僕の味方です。味方なんです。

桂木 味方なの？

クニサキ はい。プロレスは僕に嘘はつきません。だから僕もプロレスを…。

エガミ おまえ、気持ち悪いって言われないか。

クニサキ 言われます。あの試合の映像を見ました。何回も何回も何十回も。僕には、クールス。ヘシ

ヤルが決まったあの時、エガミさんがわざと3カウント取らなかったように見えました。

エガミ ……

クニサキ 何を見てたんです。

エガミ 見ていた？

クニサキ そうです。エガミさんは、ザ・クール桂木を見ていた。

エガミ レフリーが選手を見るのは当たり前だろ。

クニサキ 違う。なにか、レフリーが選手を見るんじゃないかって、違うものを見ていた。

エガミ 俺が…

桂木 コウジ…

クニサキ そう。見つめ合ってたじゃないですか。

桂木 え。

クニサキ あの時。3カウントが入る直前、デンジヤラス有明がカバーをはねのける前の一瞬、クール

桂木とレフリーのミスターエガミが見つめ合って、お互い何かを見ていた。あれは…

と、その時ドアが開いて、カドタが顔を出す。

カドタ あれ？ なにかお取り込み中。

桂木 いえ。

カドタ クニサキくん、もうじき休憩終わるよ。会場アナウンス頼むよ。それから休憩明け、リングアナとレフリーでしょう。確認してきて。その…(桂木を気にしながら)フィニッシュだけはいから。

エガミ …。

クニサキ はい(と行こうとする)

カドタ ああ、ちよつと。ほら、入つて。

安西 おこんばんわあ。

桂木 さくら…。

エガミ おまえ…

カドタ 同級会だな。

安西 いえいえ、わたしは一番下つ端でしたから。同級会つてことはないですよ。ねえ、エガミさん。

エガミ おまえ…、太つたなあ。

安西 はいはい。幸せ太りですよ。

クニサキ 安西さくら、だ。ABCベルトの。

安西 へえ、よく知つてんね。

クニサキ 知つてますよ。ABC、安西、ぶちやいく、チャンピオンシップ。

カドタ 勝手に段ボールでベルト作つて勝手に防衛戦やつてね。

クニサキ いやあ、チェックします。女子プロレス史上に残るくだらなさ…

安西 (クニサキをなぐつて) あんた、プロレスオタクだね。

クニサキ はい。

安西 じゃあ、いいとして、クールさん、ご無沙汰してます。カドタさんから聞いて、控室にいらつて。ご挨拶に来ました。

桂木 ふーん。如才ないね。相変わらず。

安西 いえいえとんでもない。後輩として当たり前ですよ。今はプロレスと縁が切れてますけど。クールさんもですよ。

桂木 え、ええ。

安西 あれ？ まあ、いいや。エガミさんもご無沙汰してます。

エガミ ああ。結婚して、子どもいるんだろ。

安西 もう大きくなりましたよ。今日は置いてきちゃった。あ、もう始まるんじゃないですか。カドタさん。

カドタ おお、そうだそうだ。

安西 いいんですか。みなさん。

カドタ よくないよ。クニサキくん。

クニサキ はい。

安西 じゃあ、行きましょ行きましょ。わたしは観客席ですけど。

カドタ コウジは、もし、あれだったら、

エガミ あれ？

カドタ なんだったら、次は出番ないし、もうしばらくいいから。きつと、あるだろ、話とか。
エガミ ないよ別に。

安西 いやあ、控室も懐かしいなあ。「ABCベルト保持者、安西さくら〜」(リングアナ口調で) つて自分で言つてここからリングに行ったもんねえ。はい、はいクール桂木、はい。(と立たせて)

桂木 ええ、なに、ちよつと…。

安西 「WWC世界ヘビー級チャンピオン、ザ・クール… はい、はい、やつてくださいよ。ザ・クール桂木〜」

桂木、紹介時のパフォーマンスをやる。

安西 おおおお。ああ、いいもん見た。それじゃ。また後で。じゃあ、失礼します。

三人出て行く。エガミ、桂木残る。

桂木 さくらは変わんないなあ。やられた。

エガミ ……こうだよ。

桂木 え？

エガミ 腕がさ、下がってる。(と紹介時のパフォーマンス)

桂木 ……

エガミ だから、こうだつて。

桂木、腕を動かす。

エガミ いや、それじゃさ、届かないよお。二階席とかさ、客席の一番奥までさ。

桂木 こうでしょ。

エガミ いやいや、こうだつて。

桂木 だから、こう。

エガミ うん。うんうん。

その腕の振りに至るまでのポーズをやってみる。

エガミ ああ、目線目線。まず、一番遠く、二階席のある会場は二階席、ないところは一番向こう

ね。そこからこうぐーとリングサイドに持ってくる。(とやってみせる)しかも、ザ・クール
なんだからさ、クールさを届けないとき。ほら。

桂木 「WWC世界ヘビー級チャンピオン、ザ・クール桂木」

桂木のコールに合わせ、パフォーマンスをするエガミ。なかなか上手。

桂木 コウジがやればいいでしょ。

エガミ だから、オレは女子じゃねえよ。

桂木 あたしだつて、クールじゃないわよ。

一瞬時間がある。二人、笑う。笑いながら、

エガミ …だからさ、それじゃだめだつて、いつも言つてたじゃん…

桂木 …わかつてるけどさ、だつてしょうがないじゃん、元々違うんだから…

エガミ …あ、あれあれ…ひどかったよなあ…

桂木 …なに、なに…

エガミ 最初におまえが考えたやつ、こんなんだっけ？（やつてみせる。ださい）

桂木 …違うわよ。こう。（やつてみせる。さらにださい）

エガミ もつとひでえじゃねえか！ クールじゃねええ…

二人笑う。

桂木 コウジだつて、最初、マドンナひろみとかいってさ…

エガミ しょうがねえだろ、ちょうどマドンナが初めて日本に来てさ、あれ大学3年だっけ。

桂木 2年。

エガミ こんなで、マイケルジャクソンとMM旋風とか言つてすごかったじゃん。

桂木 すごかった。後樂園球場。

エガミ 後樂園。ドームじゃないんだもんなあ。古い、古い話だ。あれも悪くなかつたぜ、こんなの。

（ライク・ア・ヴァージンかなあ）「マドンナひろみ〜」

桂木 それじゃ学生プロセスだよ。

エガミ しょうがないだろ。オレ、チャンピオンだつたんだから。

桂木 知つてる。

エガミ で、あんたは学生運動のマドンナだつたんだから。

桂木 クールでよかった。でもさ、元々は労働者の支援つてことを考えてたのよ。

エガミ ああ、あれだろ。クールつていうのは、ええ、アフリカ系アメリカ人のブルーカラー層が「イケてる」「カッコいい」といった意味で使っていたつていうやつだろ。

桂木 そうそう。

エガミ ダメに決まっつてんじゃないん。そんなの女子プロで。

桂木 そうでもなかったよ。わたしのファンは、そりゃ中学生や高校生が多かったけど、高校出て働いてる、家元を出て寮にいる、そんな子がたくさんいた。

エガミ そうだったな。クール ज्याパンより、全然早かったもんなあ。あれ、もしかしてオレたちが作つたんじゃないの。クール ज्याパンのムーブメント。

桂木 海外遠征も決まっていたしね。

沈黙。

エガミ すごかったよな…。

桂木 …

エガミ 不器用だったあんたが、プロレスをやりたいつて言い始めて、オレたちのサークルに来て、教えてくれたつて…、だいたいプロになりたいから学生プロレスへ行くつて、その時点でなんか違つてたぞ。

桂木 だつて全然知らなかったから。コウジが留年してまだいるの知つてたしね。

エガミ テレビで見てプロレスラーに憧れるやつはいるけど、ホントになつたやつは少ないだろ。しかも就職したばかりの一流企業やめてな。

桂木 それはさ、何度も言ったでしょ。あんな場所にいる心根みたいなものにはなかったんだつて。でも、ユウジからプロレスの試合で、勝ち負けが最初から決まってるって聞いてびっくりした。

エガミ でもショックを受けてはいなかったよな。泣き出すやつや怒るやつを、団体に入ってからたくさん見てきた。

桂木 そうだね。わたしがテレビで、目が離せなかったのは、違うものだって…

エガミ それから、すごかった。大学出の新人女子プロレスラーが、デビューして、あつというまに観客を掴んだ。二階席の一番奥の客も、リングサイドの客も、ザ・クールが怒れば怒り、痛がれば痛がつて、泣いた時は泣いた。

桂木 ある日、突然、わかつたんだよね。そういうことができるつて。もちろん、技術だからさ、練習とか経験なんだけど、自分の中でね、できるつて。ユウジが就職やめて、一緒にやつてくれたからだけど。

エガミ それでオレたちはチャンピオンになった。
桂木 うん。

エガミ でも、満足できなかった。自分たちの団体を旗揚げしよう。営業のカドタも一緒にやつてくれることになった。何回もここを満員にした。江東区にプロレスの神様が降りてきた。そう言われた。順風満帆つてあのことだよな。それで、それであの試合だよ。絶対的なチャンピオンが誕生し、海外へ。

ザ・クール桂木のテーマ曲が聞こえてくる。

エガミ 前の試合で、ABCベルト選手権で勝ち名乗りを受けていた安西さくらが、突如現れたデ
ンジャラス有明に五寸釘バットで襲われ、大流血。駆けつけたザ・クール桂木とデンジャラ
ス有明がやりあう中で、試合開始のゴング。試合はゴングマッチと決めていた。60分の時間
切れ寸前、クール・ス・ペシャル、三連発、その三発目で、カウント、1、2、3が入るはずだっ
た。

回想。エガミが桂木を見ている。桂木がそれを意識しながらクルルス・ペシャルを放つ。わずかに
体制が崩れたのか。そのまま抑えこむ。カウントが入る。1、2……エガミの手が止まる。
二人の視線が合う。時間が止まる。

桂木 どうして？

エガミ 手が…。

桂木 早く。このままじゃ引き分けになる。もうタイムアップよ。

エガミ この手は動かせない。もう一度行け。

桂木 もうあたしもデンジャラスも限界だよ。

しばらく見つめ合う。

桂木 どうして。

エガミ え。

そして、桂木がカバーの態勢をはねのけられる。クールのテーマ遠くなる。戻って。

エガミ ……どうしてだ？

桂木 え。

エガミ なんて、頭から落とさなかった？ あんたは、プロレスをしなかった。

桂木 何言ってるの？

エガミ あの技は、クールス・ヘシャルは、相手の首を巻き込んで、持ち上げてそのまま頭から落とす。

デンジャラスがあれを3回受けるためにどれだけ練習したか知ってるだろう。あのままフイニッシュしたら傷がつく。あの試合のフイニッシュは完璧じゃなきゃいけなかった。それまでは完璧だった。デンジャラスとクールの攻防は見事だった。観客をジェットコースターに乗せて、自在に操った。すごかったよ。プロレスは、客を月探査船に乗せるんじゃない。目的は月に着くことじゃないからな。言ってみれば川下りのカヌーだ。目的地なんてものはない。急流に突っ込み、ぶつかりそうな岩を寸前で避け、あるときはお穏やかな流れに身を任せ、乗っている連中を自在に…。

桂木 知ってるよ。それは。誰より。

エガミ ……そうだったな。

桂木 デンジャラスは頸椎を痛めて引退した。

エガミ ……そうなのか？ デンジャラスをいたわったってわけか。あいつが引退したのは、あの後、勝つちまったからだ。様子がおかしいおまえに気がついて、トラブルだと思って試合を処理した。あんたもそれを受けて、負けた。あの時、時間はあつたよ、ぎりぎりな。そう、あの試合は完璧なフイニッシュが必要だった。観客が熱狂した最後の完璧なフイニッシュ。それが俺たちの新たな出発になるはずだったから。なのに、なぜ…。

桂木 違う。

エガミ 何が違うんだ。

桂木 コウジが、あたしを見てたんだよ。
エガミ だから…。

桂木 あんたの目。レフリーの目じゃなかったよ。三回目、あのフィニッシュに入るとき、わたしがあの技の態勢に入るとき、わたしを見ていたコウジの目は…(こいつ)こまでやるのか…

エガミ そんなはずあるか。

桂木 …(こいつ)こまでやるのか、可哀想にな、つて。

エガミ 可哀想…

桂木 ほんとにおまえそれでいいのか、つて。一瞬だよ、何秒もなかったよ。でも、そう感じたんだ。そうしたら…。

エガミ どうしたんだ。

桂木 わたしは、わたしが怖くなったんだ。一緒に行ったマドンナのコンサートとか、プロレスを教わったこととか、よく行った喫茶店で流れていた音楽とか、ばーつて浮かんだ。あれ？ あたしは今何をしてるんだろう、つて思ったら、もうダメだった。怖くなった。そう、あんたが言ったように、あのフィニッシュを決めたらもうわたし達はきつと戻れなかった。優しさとか…。普通に。一瞬だよ一瞬で。あんなに自由自在だったのに、なんでも出来る場所だったのに。怖くなった。あの技は…、失敗したのかもしれない、自分で自分を垂直に叩きつけるように嫌だったのかもしれない…、わからない。わからないの。ねえ、あんたの目が優しかったからだよ。(こ)こまでやるのか、可哀想にな、ほんとにおまえそれでいいのか。ねえ、私のこと好きだった？

しばらくの沈黙があり、エガミ、笑い出す。

エガミ (笑いながら) なーに、熱くなってるんだ、オレたち。大昔の話だぞ、これ。20年前の話だぞ。昨日の話じゃねえんだぞ。笑っちゃうよなあ。

桂木 …

エガミ しかもさ、プロセスのさ、筋書きがうまくいかなかったって、世間の誰にも関係無い話だよ。フェイクだよ、フェイク。偽物、模造品の話さ。あんたも笑えよ、ほら、笑え、ほら。

桂木、ぎこちなく笑うか。

エガミ 20年間、なにしてたの？

桂木 …いろいろ。

エガミ 結婚したんだろ。

桂木 うん。いい人だった。

エガミ …。子ども、残念だったな。

桂木 …何で知ってるの。

エガミ 噂だよ。今日、なんでここに来た。

桂木、帰ろうとする。

エガミ 待てよ。

揉み合いになり、二人の肌触れ合うか。

桂木 コウジは、なんているの。プロレスやめたんじゃないの。

エガミ …頼まれたからだよ、あいつらに。日銭をくれるっていうしな。

桂木 なんで来たの？

エガミ おれは…惰性だよ…。ずっとあれから惰性が惰性でだせえ男になっちゃったつてやつだよ。

桂木 笑えない。

エガミ きつと、オレはなんにも変わっちゃいねえんだ。

桂木 …。

エガミ あんたは変わったのか？

桂木 元がね、なんだかわからないのよ。…ねえ。ケーファイってなんだつけ？

エガミ なに？

桂木 ねえ。

エガミ そんなことも忘れちゃったのか。レスラーやレフリーが、そうこの試合は時間ギリギリでクールス。シヤル3連発で決めようなんて話をしているときに、部外者が、つまりプロレスの仕組みを知らないやつが来たら、そう言うて話すのをやめるんだ、なあ、そんなこと、そうじゃなくてさ。

桂木 え？

桂木 ケーファイってさ、ファイクをひっくり返したんだつけ？

エガミ …。

桂木　　そうか、

エガミ　　そうだよ。

桂木　　コウジが、今日私を呼んでくれたの？

エガミ　　何の話だ。

遠くからゴングの音。エガミ、窓からリングを見る。

エガミ　　じゃあ、行くわ。惰性でもやることやらねえと…。おまえは…

桂木　　フェイクか。なにがリアルでなにがフェイクなのかなあ。

エガミ部屋を出て行く。桂木が残される。桂木、窓に近寄る。遠く、リングを見る。しばらく見る。やがて回想。赤ん坊の泣き声が聞こえてくる。産院なのだろう。

遠山　　（赤ん坊を抱いている）ほーら、好子、お母さんだぞ。おー、よしよし、お母さん頑張ったん

だからなあ。なあ、好子。はい、おかあさんに抱っこしてもらいな。（と抱かせようとする）

桂木　　どうすればいいの。

遠山　　どうすればいいって、ひどいお母さんでチュねえ。首がまだ座っていないから、ちゃんと持つて、ほら。

桂木、赤ん坊を抱く。

遠山 好子、よかつたでちゅねえ。抱っこしてもらって。好き、大好き？ 好子の好は、大好きの好きですよお。

桂木 好子…

好子、嬉しそうに声を上げている。

遠山 なあ、ひろみ。もういいんじゃないか。

ひろみ え？

遠山 おまえが、昔、なにをしていたか、それからなんで時々、あんなに苦しそうな顔になるのか、教えてくれても。

ひろみ あたし、別に苦しくなんて…

遠山 おお、よちよち、好子。こいつがさ、好子ができてさ、俺たち3人になっただろ。だから、もういいんじゃないかって。おー、好子、好子…可愛いねえ。

ひろみ そうだね。

遠山 え。

ひろみ わたしには、あんたと好子がいるんだものね。それでいいじゃないねえ。

遠山 う、うん。

ひろみ ほら、好子抱かせて。

遠山 ああ。ほら。

子どもの声遠ざかり、回想終わる。

桂木 ケーフェイ。フェイクの打合せ。ばれないように。ひっくり返して。ああ、なにがリアルでなにがフェイクなのかなあ。

赤い封筒を取り出し、中の手紙に目をやる。いつのまにか安西がやってきた。桂木は気がつかない。

安西 つまらなかつたですよお。

桂木 さくら。(と封筒をしまう)

安西 あんまりつまらないから、次の試合は見るのをやめました。なんで、あんなことしかできないんですかねえ。

桂木 安西さくらならできるって？

安西 いやいやいや。主婦ですから、もう。

桂木 そう。

安西 はい？

桂木 幸せなんだ。

安西 はい。ダメですか。

桂木 ダメじゃないでしょ。

安西 クールさんは幸せですか。

桂木 ドカンと来るねえ。そういうとこ、変わらないな。

安西 よく怒られてましたからね。

桂木 それで、怒られたら言い訳をする、反省しない、同じことをくり返す、

安西 それで、先輩を小馬鹿にする。ああ、クールさんのことはしてないですよ、ねえ。

桂木 そうだったかな。

安西 でも、みんなに嫌われてるんですけど、みんな憎めなかったでしょ。っていうか、結構感謝されたりして。ほら、ビッグイーター大田原さんのコスプレで試合した時、やられそうになると腰の袋から食べかけのベビースターラーメン出して食べて、何故か相手が食べ終わるの待ってるって、大受け。それから自分が攻撃のチャンスの時にも、なんか食べ出しちゃって、そのすきに結局負けるって、観客盛り上がったでしょ。大田原さんも最初怒ってたけど、逆に知名度が上がって人気出るやつて「ありがとう」とか。笑っちゃいましたよ。馬鹿じゃないのか。

桂木 光子の時は、笑い袋つけてたんだっけ？

安西 あれも受けたなあ。強烈なバックドロップ受けて笑えばなしか。あたし、プロレスでできなかったから。

桂木 自分で言うか。

安西 言いますよ。苦労しましたから。

桂木 もともと美少女路線だったのにな。

安西 女子プロレスは美人のハードル低すぎますけど、いくらなんでもねえ。

桂木 あれは、カドタさんのアイデアだったよ。わたしとコウジは反対した。

安西 ああ、残念。色物じゃない方向もあったのになあ。

空いたままの窓から、歓声が聞こえる。

安西 やつてる、やつてる…。ねえ、知ってます？ あの子達、みんなアナタに憧れてプロレス始めたんですよ。実際試合を見ていない連中は、DVD見て、クールがリングで動いたら、女の子たちがギャーギャー泣くのにびつくりして、わたしもああんりたいって。馬鹿ですよ。

桂木 どういうこと？

安西 顔で表現する、身体で表現する、指先、足先まで全部活かす、手だよ、手だけで伝わってくるだろ。ほらロープ掴んだ手の表情を見ろ。そういつて新団体旗揚げして、わたしらに教えてくれましたよね。

桂木 わたしも、それがわかるまでは苦労したからね。だから、みんなには…。

安西 嘘。

桂木 ？

安西 無理なんですよ、そんなの。

桂木 え。

安西 たしかにあなたは、努力したり、考えたりしたんでしようけど。わたしには無理。ただって無理。

桂木 プロレスできたんですよ。

安西 わたしは、そんなところじゃないところでコツコツ積み上げてたので。すぐに一番は諦めましたよ。ザ・クール見てたらわかるじゃないですか。かないつこないって。だからABCですよ。安西、ぶちやいく、チャンピオンベルトですよ。

桂木 …

安西 いつ毒盛ろうか、いつ殺そうか、ザ・クール桂木。そんなことばかり考えてました。一番は諦めたけど、一番じゃなきゃ嫌じゃないですか。なのに…。

桂木
なのになんか？

安西
ブサイクでした。あの試合。あの潰れるきっかけになったあの試合。駄作でしたね。がつかりしました。

桂木
あたしがやめて、あんたとデンジヤラスで、選手権やる話があったって聞いているよ。

安西
ええ。それで、わたしが勝って、団体のエースになるってね。

桂木
できたんじゃない、あんたなら。

安西
できたと思いますよ。

桂木
なんでやらなかったの。

安西
やるわけないじゃないですか。馬鹿なんですか。

桂木
いい加減にしなよ、さくら。

安西
あれ。いい感じじゃないですか。

桂木
すこーし、

安西
調子に乗ってないかい？ 懐かしい。クール桂木の決め台詞。

桂木
：

安西
で、幸せですか。

桂木
え？

安西
団体が解散することになった時、勝てると思ったんですよ。

桂木
勝つ？

安西
プロレスじゃなくてもいいんですよ、あたし。最初から。

桂木
え？

安西
クールさんにとってプロレスは特別だったんでしょうけど、あたしは違うんです。フェイクの

世界もちよつと飽きてきちゃったし。ほら、あたし幸せでしょ。旦那はやさしいし、お金だつてそれなりにあるし、子どももいるんですよ。リア充、リア充。いいじゃないか。

桂木

ねえ、本気でそう思ってます？

安西

どういふことだい？

桂木

わたしのこと見下してませんか。

安西

桂木

いらつとするなあ。あんた、自分のことわかつてんのかよ。
…どうだろう。
桂木ひろみさん。じゃあ、ほら、見ましようよ。試合。一緒にスタンドに行つて、馬鹿だなあ、こいつら。わたしの真似したつて敵うわけないのに。馬鹿だなあ。一番になれないなら、違ふこと考える脳みそないのかよ。ほらリア充のわたしと一緒に。さあ、行きましよう。

安西

安西、そう言うことさつさと控室を出る。残される桂木。動けない。しばらくの間。安西、唐突に戻る。

安西

行けないですよねえ。幸せじゃないですもん、桂木さん。あたし、何で今日来たかわかります？ どうだ、羨ましいだろ、つて。あたしは幸せなんだぞ、つて、上から見に来たんです。もちろん、クールさんのこともですよ。いや、むしろクールさんだ。勝つたつて。あたし、上から見てるんです。

桂木

安西

なんで知つてた。
え。

桂木 わたしが来るってこと…

安西 それは…

桂木 知るはずがないよ。だって、来るか来ないか自分でもわからなかったんだから。

安西 …わかってる人がいたんじゃないですか。クールは来くるって。ハハハ。

桂木 くだらないよ。

安西 …。ジム、通ってるでしょ。

桂木 え？

安西 話し、聞きましたよ。

桂木 誰から。

安西 ある人から。フィットネスジムでスクワット1000回やるって、あんた頭おかしいでしょ。

50過ぎのおばちゃんですよ。そんなおかしいことしてるから、クールは来くるなんです

よ。ハハハ。

桂木 そうかもね。

桂木、赤い封筒を取り出した。

桂木 これ、あんた？

安西 へえ。(同じように赤い封筒を取り出す)

ジャージ姿の大田原と光子登場。二人紙包みを持っている。

大田原（桂木をみて）ああ、いたあ。

光子 よかった。

大田原 さくら…。

光子 え？

大田原 あんた、さくらじゃない。

光子 ええ！ ほんとだあ。

大田原 なに、どうしてたのよ。

光子 ほんと、変わらないわねえ。

大田原 やだ、何言ってるのよ。変わったわよ。ねえ、大きくなって。

光子 ああ、そう言えば。

安西 おかげさまで幸せ太りです。

大田原 聞いたわよ。いいわねえ。亭主と子どもが居て…。

安西 先輩も変わらないですわねえ。まったく。

大田原 やだ、あたしだつてね。変わったわよ。太ったの。

光子 自分で言っちゃダメよ。

大田原 ほんと。でも、あんたも来てくれたんだねえ。

安西 ええ、まあ。みなさんの様子を見に。

大田原 あんたのところにも行ったんでしょ。手紙。ね、必ず来てくれると思ってたんだ。あんただつて、ほら…。

光子 大田原…

大田原 え？ あ。

安西　へえ、驚いた。これ、まさか、先輩方なんですか。

と、赤い封書を。

桂木　それ…。

桂木、安西から赤い封筒を取り上げ、中身を見る。

桂木　…。

安西　…新日本女子プロレス復活大会、20年前の忘れ物を取り返しに、ある女が現れる。同じなんですよ。そつちも。

桂木　どういうこと？　大田原！　光子！

大田原　知りません、知りません。ほんと、何も知らないんです(と繰り返しながら食べる)…

光子　すいません、すいません、ほんと、わたしたち知らないんです(と繰り返しながら笑う)…

桂木　(そのさまを見て)おまえら、いい加減にしろよ。

二人意を決して、

大田原、光子　お願いします。

桂木　え？

ふたり、紙袋を桂木に渡す。中身は、試合用のコスチュームである。

安西 あらあく。なんか出てきたよ。しかも、それ20年前のコスチュームと同じじゃん。

大田原 ザ・クール桂木、復帰戦お願いします。

光子 だから、来てくれたんですよね。

桂木 いったいなんの話なの？

大田原 わたしたち、お金貯めて、また大会やろうって話して、

光子 デビル肉丸の店で働いてて…

桂木 聞いたよ。それは。

光子 でも首になつて…。

桂木 それも聞いた。

大田原 道路工事の誘導やつて、お金貯めたんです。

桂木 うん。

光子 もう労働基準法ぶちぎったんです。

大田原 すごいんです。あたしたち、毎日24時間働いたんです。

桂木 どうやって？

光子 覆面かぶつて、正体不明の誘導員つてことで、労働基準法ぶちぎったんです。

安西 何言つてんだかわからないよ。

大田原 でも、チケット売れなくて、今回で最後だね、

光子 終わったら夜逃げしようね、

大田原 外は寒いだろうね、

光子 世間は寒いだろうね、つて話してたら、

大田原 カドタさんが、スポンサーついたって言ってチケット売ってくれたんです。

桂木 ええ。良かったじゃないか。だけど、わたしは…。

光子 でも、気がついたんです。それだけじゃダメだつて

二人も、赤い封筒を取り出す。

安西 ええ？

大田原 私たちにも来たんです。

光子 それでどうしようつて、

大田原 カドタさんに相談したんです。

桂木 カドタさん？

大田原 はい。そしたら、これ渡されたんです(コスチュームのこと)

桂木 なんで？

大田原 なんにも言わなかったんです。

光子 でも、わたしたち、すぐにあの時のコスチュームと同じだつてわかつて、それで、気がついたんです。

桂木 なにを。

大田原 わたしたちだつて、忘れ物あるんじゃないかつて。

光子 忘れられないんです。

大田原 あの時、桂木さんがデンジャラス有明からなんでフオールを奪えなかったのか。

光子 なんで、新日本女子プロレスは解散しちゃったのか。毎日毎日話してたんです。

大田原 二人で20年間毎日毎日。

安西 嘘つけ。

大田原 嘘じゃない。私たち馬鹿だから。わかんないから話してたんだ。

安西 …。

桂木 それで？

大田原・光子 私たちが悪かったんです。

安西 はあ？

大田原 あの日、わたしたち、デンジャラス有明率いる極悪地獄一門のハンマー長谷川とカッター前園とタッグマッチやったじゃないですか。

光子 あの時、もつとやられればよかつたつて。もつとぐつちやんぐつちやんにやられて、客がヒートして、もう最高にデンジャラスを恨んでくれればよかつたんだつて。

大田原 そうしたら、きつとあのメインイベントで、ザ・クール桂木が、デンジャラス有明を3回頭から突き落として、勝ってくれたはずだつて。

光子 そうですよねえ、桂木さん。いつも言ってたじゃないですか。お客さんの心を全部持つて行く奴こそが一流のプロレスラーなんだつて。だから、

安西 あんたら、馬鹿なのか。

大田原、光子 え。

安西 馬鹿なのか、悔しくないのか。それじゃ、なんだ、あんたら引き立て役じゃないか。だから、あんたたちはダメなんだ。

大田原 (不思議そうに) なんで。

光子 (あるいは素朴に) どうして？

安西 え。

大田原 あたしは引き立て役に決まってるじゃない。

光子 そうだよ。それで何でダメなのよ。

安西 ダメに決まってるじゃないですか。

光子 あんただって、あの日、20年前、大流血してさ、デンジャラス有明とザ・クール桂木の間に因縁作って盛り上げたじゃないか。

安西 それは…単なる仕事でしょ。別にあたしはやりたく…

大田原 わたしがやりたかったんだ。あれ。

安西 え。

光子 わたしだってやりたかった。それ。流血して泣きながら、クールさんにしがみついて、デンジャラスをやってくれ、そう言いたかったんだ。

安西 なんなのよ、ぜんぜんわからない。あーあ、気持ち悪い。なにしがみついていたんだよ。いつまでやってんだよ。

光子 ねえ、あたしたち中学しか出てないから、馬鹿だからうまく言えないですけど、桂木さんならわかるでしょう。言えるでしょう。

大田原 そう、大学出てますもんね。馬鹿じゃないのに、プロレスやっててすごいんです。ザ・クール桂木は。

光子 うん。あたしらは馬鹿だからやってるから、

安西 馬鹿。

光子 馬鹿に馬鹿って言っても、意味ないよ。

大田原 そうそう。

安西 …あんまり気持ち悪いから、観客席に行くよ。どんなにつまんなくても、ここよりはマシな気がするよ。

光子 良かった。

安西 え？

大田原 帰らないんだ。

安西 …。(行こうとする)

桂木 さくら、あんたはなぜ来たんだい。

安西 言ったでしょ。上から見下ろしに来たんだって。…あの日、わたしは完璧に仕事した。盛り上げたよ。デンジャラス有明が出てくるお膳立てちゃんと整えただろ。あんたのために。だけど、あんたは…。ここに来た理由は…、さっき言ったでしょ。わたしの勝ちなんです。だつてリア充なんだから。

桂木 おつしゃるとおりだよ。羨ましいよ。平凡な男と結婚して、子どもができて、わたしだつてそうしようと思ってたよ。でも、なんだかうまくいかないんだ。

安西 だからわかってないんだよ、あんたは…。子どもさん、なくなっただんじょ。

大田原 光子 え。

安西 10年経とうが、20年経とうが、あんたには無理だ…。わたしみたいになるのは。そういう人なんだから。子どもが死のうがさ。

桂木、安西の胸ぐらをつかむ。

安西 ほら、その目ですよ。

桂木
…

安西
あたし、試合やるるとき目つきが変わるのはいいけど、それをあとの人生にまで持ち込みたくないって思ってたんです。桂木さん、今もおんなじ目じゃないですか。わたしは別人ですけど、ザ・クール桂木と桂木ひろみは…、同じ人間です。

桂木
…。

安西
ほら、わかってない。「すこーし、調子に乗ってないかい？」あれ、まじで言ってたでしょ。

桂木
…わからないんだよ。

安西
だつて。すげえな。ははは…。でも、もう忘れちゃいました。殺したいほど憎んでいたつてことは覚えてるけど、それがどんなに悔しくて絶望だったか、もう忘れちゃいました。忘れられるんですよ、わたしには。忘れられないんですよ。

桂木
…

安西
あ、あの時の傷、まだ残ってるんですよ。ほら。（と額の傷を見せる）これ、羨ましい？（大田原と光子にもしかすると先輩方はほんとにうらやましいかもね。勳章とか。でも、リア充にはね、邪魔なだけなんだよね。過去の傷。美容整形しようかなあ、やつぱり。

安西去る。桂木、赤い封筒を見る。

大田原
それが届いたから来てくれたんですよね。

光子
忘れ物をとりにきたんですよね。桂木さん。

と、クニサキが転がり込むようにやってくる。

クニサキ と、取りにき、来ました。

大田原 クニサキ

光子 何が来たっていうんだよお！

と言いながら技をかける。以下、技をかけられながら。

クニサキ ネットで流れていたとおりだ。20年前の忘れ物を取りに来たんだ。

大田原 何言ってるのよ。忘れ物を取りに来た人は、ここにいるだろうがあ。

光子 そうだよ。

クニサキ だって、だって自分で言ってるんですよ。赤い封筒持つて。20年前の忘れ物を取りに来たつて。

桂木 誰が来たの。

と、その時、リングのほうでどよめきが湧き上がる。そして音楽が流れる。窓際に駆け寄り、技をかけたまま、かけられたまま、大田原、光子、クニサキ。

光子 これつて…。

大田原、クニサキ 極悪地獄一門のテーマ。

クニサキ 来た、来た来た。

光子 ハンマー長谷川。

大田原 カッター前園。

クニサキ 一門総帥、デンジャラス有明だ。20年ぶり、20年ぶりだあ。(感涙にむせんでいる)どう
すんですか。え、どうすんですか。

大田原 なんだよ。

クニサキ おさまりつきませんよ、これじゃ。(携帯を取り出し)ほら。

光子、大田原、携帯を覗きこむ。

大田原、光子 【拡散希望】 新日本女子プロレス復活大会、20年前の忘れ物を取り返しに、あ
る女が現れる。#デンジャラス有明 #ザ・クール桂木

クニサキ 今日になってから突然、すごい勢いで広まってるんですよ。お客もどんどん増えてます。

会場で暴れアジテーションを繰り返す、極悪地獄一門の姿が浮かぶ。「あいつはまだか」「ク
ールはどこだ」と、『どういうつもりだ』の声。コウジ、カドタを引きずるようにして現れ
る。

桂木 どうしたの。

カドタ、激しく咳き込んでいる。

エガミ こいつ、裏口からデンジャラスたちを体育館に入れたんだ。カドタ、オレはなんにも聞いて
ねえぞ。どう始末つけるつもりなんだ。っていうかよ、これもおまえなんだろ。(と赤い封

筒)

クニサキ なんですか、それ。(と手に取り中を見る)これ…。

エガミ 昔の関係者のみに配布の手紙ってわけか。

クニサキ カドタさん、ネットで情報流したのカドタさんなんですね。(皆に見られて)いや、違います、僕は、カドタさんに教えてくれて言われて。ファンのサイトや拡散の仕方を、ちよつと…。

カドタ あのとき、覚えてるか、コウジ。桂木も。

桂木 え？

カドタ 前の団体飛び出してさ、二人で新日本女子プロレス作ろうって。なあ。

エガミ それが、どうした。

カドタ おまえらすぐかったよ。おれ、嬉しくてさ。だって、客がわんわん入ってさ、それがみんな泣いたりしてんの。俺の仕事って言ったらさ、営業の仕事って言ったらさ、ザ・クール桂木、すごいんだってことを知ってもらえればいいんだからさ。

エガミ だから、それがどうしたって言うんだよ。何の話してんだ。(と胸ぐらをつかむ)

光子 やめてください。

大田原 コウジさん。

エガミ 何だお前もグルなのか。

大田原 違います。カドタさんなんです。

エガミ ええ？

大田原 この大会のチケット買ってくれたのカドタさんなんです。そうですよ。カドタさん。

光子 スポンサーついたなんて嘘なんですよ。だって私たちメインでやる大会にお金なんて出すとこないもの。

カドタ 20年も普通に働いてたらさ、そりゃ貯まるさ。

大田原 光子 やっぱり。

クニサキ でも、100枚や200枚じゃないですよね。

カドタ だからそのぐらい貯まるって。

エガミ なんなんだよ。

カドタ コウジ、なにいらついでんだ。

エガミ え？

カドタ いらついでるじゃないか。

エガミ 別に…

カドタ じゃあ、なんで今日来たんだ。

エガミ だから、こいつらが頼みに来たからだろ。金もくれるっていうしき。

カドタ その手紙、おまえんところには、こいつらから連絡行く前に届いただろ。

光子 そうなんですか。

大田原 コウジさん。

コウジ ほじくりかえすなよ。なんでだよ。たかがプロレスだよ。20年だよ。ほじくり返すなついでるだろ。なんでだよ。

カドタ オレ、陸上の中距離やつてたんだ。

コウジ はあ？

カドタ 結構キツイんだよな。中距離。それでも、速くなりたくて速くなりたくて。中学も高校も必死にやったよ。地区大会じゃそれなりにいいとこあったりしてさ。

コウジ もういいよ。知らないよ、そんな話。

カドタ でも、気がつくんだよな。高校の終わり頃にはさ、いや、違うな、ほんととはもっと早く気がついてたんだ。オレより、速い奴がいるって。それで、それはどう努力したって、どうしようもないことだつて。

クニサキ わかります。

光子 わかります。

大田原 わたしも。

コウジ ……。

カドタ ほかのこと少し考えてみた、他のスポーツとか、勉強とか、絵も描いてみた。でも、みんな同じなんだ。一番にはなれない。

コウジ ……そんなことあたりまえじゃないか。

カドタ うん。あたりまえだよ。一番になる競争からリタイアしてさ、いつしかそんなことも忘れてしまう。そんな競争があつたことさえ忘れる。でも、ちよつとだけ残ってるんだ。心の何処かにさ。擦り切れてもくすぐる。でも、一番にはなれない。おれ、そんな時見たんだ。一番をさ。目の前で。

コウジ だからだつていうのか。だいたい、おまえ、そんなワケアリのな手紙出して、20年も前の話しがさ、動くと思つたのかよ。思い通りにうまくいくと思つたのかよ。頭おかしいんじゃないか。

カドタ 思つてないよ。

エガミ はあ？

カドタ 俺は俺にできること、一生懸命やっただけさ。

桂木 ……。

と、会場から悲鳴。クニサキ、窓に駆け寄る。

クニサキ あれ？ 誰かやられてる。あれって…。ああ。

カドタとユウジを除き、窓辺に近寄る。

桂木 さくら…。

クニサキ ABCチャンピオン、安西さくらがデンジャラス有明に襲われてる。これも20年前の再現だ。僕、行きます。やっぱりプロレスは僕に嘘はつかなかった。

クニサキ、控室を飛び出す。大田原、光子も後を追う。

エガミ カドタ。

カドタ でも、動いたじゃないか。

エガミ え。

カドタ 馬鹿だなあいつら。俺も馬鹿だけど馬鹿だなあ。デンジャラスもハンマーもカッターも今日来てくれて話したら涙流して喜んでたもんなあ。あいつらも忘れてなかったんだなあ。ユウジ、おまえだってそうだろう。

エガミ 何かを失くしてそれが忘れられないままだった。オレだって…。

桂木 何で来たのかなあ…。

エガミ、カドタ え？

桂木 もう少しでわかりそうなんだよ。わたしがなんだか、この20年真つ暗い中にいるみたいで、いや、違うな、自分自身が暗闇になつてみたいなのは今ではもう、はつきりわかつて、それがどんなことなのかとか。なんで、あの時、あのクルスペシャルの三発目、ユウジの目を見て、わたしは投げるのを躊躇したのか。なんで20年間、ふすふすと心の奥の方に燃え尽きないなにかがあるままなのか、消えたかと思うと消えないで、あるのはなぜなのか。たぶん、わたし、この20年、普通に幸せで、普通に不幸だつたはずなのに、どうして、このままじゃだめなんだろう。

その時、クニサキが控室に入ろうとする男を必死に押しとどめていた。

男 離せ。

クニサキ 駄目です、関係者以外立入禁止です。立入禁止なんです。

男 ひろみ、やっぱりいたのか。

クニサキ え。

男 離せ。(クニサキ、離す)探して探して、どこにもいなくて、きっと今日会場に来るんじゃないかと思つてた。ひろみ、帰ろう。

クニサキ 誰なんですか。

桂木 あんた。

男は遠山だつた。

遠山　　なんで出て行ったんだ。まだなにも決めてなかったらう、俺たち。

桂木　　そうだね。ごめんね。決着付ける前に逃げ出して。でもね。わたし、あなたと一緒にいられるような女じゃないってことだけはわかったんだ。だから、

遠山　　そんなことない。そんなことないよ。おまえ、結婚式の後、おれのおふくろに涙流してありがとうございますって言ってたじゃないか。好子が生まれた時、おれと好子がいるからもう大丈夫だって、昔の話をしてくれたじゃないか。

桂木　　全部、嘘だった。
え。

桂木　　ううん、今になってそのことがはっきりわかる。ご飯を作ってあなたの帰りを待つて、たまに喧嘩して、マンション買おうかってローンのやりくりの話をして、幸せそうにしてるの、それが…

遠山　　それがなんだよ。

桂木　　それが、わたしにとってフェイクだったんだ。

遠山　　フェイク…。

桂木　　あなたと話していると、好子と一緒にいると、時々、頭のなかで「ケーフェイ、ケーフェイ」て声が聞こえてたの。今、内緒の話をしているから、どうやって本物らしいものを作るか、そんな話をしているから…。ケーフェイ、黙れって。

遠山　　何言ってるんだ…

桂木　　平凡な男と結婚して、子どもができて、わたしだってそうしようと思ったよ。悪口じゃないんだよ、平凡で。子どもが死んだでしょ。あれね、

遠山　　だから、お前のせいじゃない。もうおまえが病院に連れて行ったときにはどうしようもな

かった…

桂木 わかっているの。

遠山 え。

桂木 わたし泣いてたでしょ。でもあまり悲しくなかった。いや悲しかったんだけど、このくらいなんだなって悲しさだったの。生まれたときもそうだった。嬉しかったけど、このぐらいなんだなって。あんたといるときも、

遠山 やめてくれ。

桂木 だから、それはわかったの。わたしはそういう人で、そうずっとプロレスやつてるときのほうが、幸せだったって。

エガミ …忘れりゃよかったんだ。あんとき。

カドタ え？

エガミ …普通は忘れるんだろ、きつとき。忘れられないから、こんなことになる。20年も経つて、まるでガキだよ。桂木。

桂木 なに。

エガミ あれはさ、きつかけになるはずだったんだ。おまえにとつて。俺たちにとつて。一瞬立ち止まったんだよ。だれでも、立ちどまるよ。こんな馬鹿なことやって、この先どうなるんだろう。一番になろうと思つて、あがいて、うまくいつて、順調で、だけど社会とか、年齢とか、危険とか、地位？ そんなもんが頭ん中でぐるぐるしてき。いや、そんなたいそいうな話じゃなくても、きつとこくこく普通の毎日だつて、家族とか友情とか、子どもとかいっぱいくつついてくる。愛とかかな。でも、おれ、こいつは立ち止まらないんだらうなって、見て思つたんだ。あの時さ。

桂木 わたしのこと。

エガミ そうだよ。だから意外だったよ。でも、だから、あのまま忘れちまえばよかったんだ。本当の自分とか本当の人生とか。自分にとって何がリアルかとかさ。全部塗り替えちまえばよかったんだ。若かったとか、馬鹿なことを考えてたとかやっていたって記憶に。どこかで立ち止まっちゃう一瞬があるんだ、きつと。それで人は夢から醒めるんだ。それが普通だよ。そうできたなら…。

桂木 立ち止まって、そのままの人間はどうすればいいんだい。

大田原、光子、額から流血した安西を運び込んでくる。大丈夫ですか、そっちに寝かせて、など。

安西 なんてこんな目にあうんだよお。痛い、痛いよ。畜生、畜生…

エガミ じつとしてろ(傷口を見て)、クニサキ、救急車。

クニサキ はい。

安西 馬鹿、何言ってるんだ。あんた、エガミさんさ、レスラーの傷は、卵の薄皮貼り付けて、バンソウウでぎゅつと傷口くつつけりゃ治るんだろ。あんた、いつもそう言ってたじゃないか。いらないよ、救急車なんか。

エガミ、無言でクニサキを促すと、クニサキ行く。安西は横たわったまま、だれにもなく叫び続ける。

安西 ちくしょう…。わたしは自慢しに來ただけなのに…。おまえら、みんな馬鹿だ。なにやっ

てんだ、こんなことして。いいか、平凡な人生がどれほどすげえかわかってんのか、ええ。

カドタ さくら、わかってるよ。俺たちが一番良くわかってる。

大田原 あんた、なんで、自分からデンジャラス有明にやられにいったの。

カドタ え？

光子 馬鹿だからでしょ、あんたも、ねえ、そうだよね。

大田原 馬鹿だから、ここにきたんだよね。そうでしょ、さくら。

安西 違う。

大田原 じゃあ、どうしてよ。

安西 一番になりたかったよ。一流になりたかった。だけどさ、わたしは、二流でもいいから人生壊したくないって思ったんだよ。生き残りの勝負への最終的な執念ってやつ？ そういうのがわたしにはなかったんだよ。頭良すぎてさ。ザ・クール桂木なんて人じゃないんだもの。人格なんていかれちゃってさ、わたしは、ぎりぎりまで追い込んで、そういうの選ばなかったんだよ、いや選べなかった。わたしは二流なんだ、そう思ったよ。

光子 じゃあ、仲間だよ。同じ二流じゃないか。

大田原 うん。

安西 あんたたちは三流。

大田原、光子 んがああ。

安西 試合やるとき、目つきかわってもさ、それを、その後の人生まで持ち込むのは嫌だったんだよ。二流でもいいから自分の人生を壊したくなかったんだよ。だから、クール桂木の代わりにエースになんてなれるはずがなかった。

エガミ さくら、一度逃げ癖が付いた奴は何度でも、逃げるぜ。

桂木 あんた、人のこと、

エガミ わかつてるよ、俺のことだ。

安西 でも、同時に二流でいいと思ってる自分が嫌だったよ。それが今来た理由さ、きつと。わからないけど。でも、今日でおしまいだ。ねえ、わたしはさ、なんどでも逃げてやる、何度でも何度でも。何度でも逃げてきつと逃げ切つてやる。それが幸せだよ。

桂木 あんた…。クールだね。

安西 いい、やられつぷりだったろ。後はあんたの番だろ。本物のクールさんよ。

桂木 …

安西 勝つたんだか、負けたんだか、わからねえ。プロレスと同じだな。わかつてんだろ。(桂木にわたしはわたしはあんたがうらやましいんだ。

遠山 知らねえよこんなの。八百長じゃないか。勝ち負け決まってるんだろ。なにがいいんだよ。

クニサキ …勝ち負けなんて大した問題じゃないですよ。プロレスは八百長だつて言うんなら、人生だつて、たいいてい勝ち負け決まってるじゃないですか。フェイクですよ。本物のフェイクは人生ですよ。

安西 あーあ、そのフェイクからようやく抜け出したと思つたら、ずっとこの先、またまたフェイクの人生だよ。だけどそういう人生つてもそんな悪くないんだぜ。うう。(傷口が痛むのか)

クニサキ 救急車今来ます。

安西 行くか。

クニサキ あ、タンカ待つててください。

安西 馬鹿。あたしだつて歩けるよ、一人でさ。

安西行く。歓声が聞こえる。

クニサキ 客が騒ぎ始めてます。デンジャラスが煽ってる。クールはまだかつて。

大田原 あたしらはやるだけ。

光子 どつちにしたつて。ビッグイーター！

大田原 スマイリー！

大田原、光子 行きますか！

大田原 安西さくらじゃまだまだ役不足ですよ。

光子 あたしらいつて、ハンマー長谷川とカッター前園に借り返してきます。

大田原 めちゃめちゃにやられて、盛り上げてきますよ。馬鹿ですから。

大田原、光子行こうとすると、

桂木 馬鹿は、頭が悪いのは許せるんだよ。だけど、心が馬鹿なのは見抜かれる。見抜いちやった

らしらけるんだ。お客さんつてやつは。

大田原、光子行く。

クニサキ どうしてみんなあんなに人の悪口とか、上司の愚痴とか、会社が嫌だとか言つて、それでも毎日同じこと繰り返して平気なんですかね。ほんとはわかってるんですかね、つまらないこと言つて人生誤魔化してるの。それともわかってないんですかね、ほんとうに。僕、会社で勤めてた時、なんか喋ろうとすると、みんながケーフェイス、ケーフェイスって大声で叫ん

で、それ言うなよ、言ったらおしまいだろう。ケーフェイ、ケーフェイ。

桂木 ああ、そうか。

クニサキ そう言ってるっていつも思っていました。僕はそういうの、うまくできなかったんです。わからないですけど多分。じゃあ、行ってきます。ザ・クール桂木のコールは僕がやりますから。

エガミ クニサキ、俺のレフェリングよく見とけ。すぐに行く。

クニサキ はい。

クニサキ、行く。

カドタ (桂木に)行くのか。

桂木 (クールに)あんたに乗つかるんじゃないよ。忘れ物を取りに行くって話でもないさ。わかったよ。人はあきらめてあきらめて、あきらめたことさえ忘れるんだ。だけど、何年経とうが、忘れない奴っているんだねえ。忘れられないやつっているんだ。あんな馬鹿なことをよく、つて昔の自分を笑わない奴がいるんだねえ。それは強さだったり、愛？ だったり、インチキな八百長だつてなんでもいいんだ。でも、忘れられなくて、それでも黙っていることや自分をごまかしていることができないやつらがいて、わたしもそうだつてことがわかったんだ。

エガミ ……そういうのなんて言うか知ってるか。

桂木 なに？

エガミ 諦めが悪いっていうんだ。もう何年経ったと思ってるんだ、ばばあじゃねえか。

桂木 プロレスは、身体でやるんじゃない。心でやるのさ。

カドタ 見せてくれよ。俺たちにとってプロレスは特別じゃないか。

桂木 チチチ。プロレスが特別なんじゃない。あたしにとってのすこし特別がプロレスなんだ。

カドタ クール！

エガミ 行けよ、行きたいんだろ、あんたはさ。行きたいんだから。そういう人なんだよ。おまえは。フィニッシュはわかってるな。クルス。ペンシャル三連発だ。大丈夫、デンジャラスはわかってるさ。

カドタ 俺、やれることは一生懸命やったさ。

遠山 …ほんとに馬鹿なんじゃないのか、あんたたち。わからねえ。わからない。

桂木 あんたとあたしの幸せが、あんたとわたしのリアルとフェイクが一緒だったら良かったのね。優しくしてくれてありがとう。

遠山 …。

エガミ あんた、見てやったらどうだ。好きな女がやることをさ。こいつがやってることを最初から八百長だと思ってみてみなよ。そうしたらさ、見えてくるぜ。勝ち負けなんかよりずっとすごいもんがな。桂木、オレはもう立ち止まったりしない。オレは、お前のごとんなか好きじゃなかったよ。行くぜ、俺は先に。

エガミ、カドタ去る。やがて、遠山、ふらふらとしかし最後は駆け出すように行く。クールは一人残される。クールコールが次第に地鳴りのように大きく。

桂木

ああ、時間がかかったなあ。こんなことがわかるだけのために。悪かったなあ。あんたにも好子にもみんなにも。やっぱりわたしも馬鹿なんだなあ。

コールドますます激しく。少し震えているか。

桂木

さあ、行くか。これは、だれのためでもないんだよ。そうあんたたちのためじゃない。これつぼちもね。わたしは、わたしのためにいくんだ。クールにね。

やがてザ・クール桂木がコールドに迎えられ、まばゆい光の中に浮かび上がる。

終わり